〔資料紹介〕

市川市堀之内貝塚発見の縄文土器

庄司　克

はじめに

市川市北国分町にある堀之内貝塚は縄文時代後期の堀之内式土器の標式遺跡（註１）として古くから著名であり、過去数回にわたって頻繁に発掘調査が行なわれている。これらの調査によって堀之内式土器の型式内容はすでに確立したかにみえるが、実際にはその内容はあまりにも複雑で地域性が激しく、各研究者によってその捉え方が異なる傾向さえみられる。とくに堀之内Ⅱ式期の土器の組合せや、その粗製土器のありかたについては不明確な点が多く、今後の研究課題として早急に究明されねばならない問題であろう。

本資料は昭和34年頃より昭和37年にかけて筆者が堀之内貝塚において採集したものであるが、堀之内式の精製・粗製土器の伴出例としてここに紹介したい。なお、これらは現在千葉市加曽利貝塚博物館において展示・保管してある。

Ⅰ　土器の発見地点と周辺の状況

堀之内貝塚は日本人類学会創立70周年を記念して、昭和29年に明治大学、早稲田大学、慶応義塾大学の三大学によって合同調査が行なわれている。このとき、発掘に先立って明治大学考古学研究室の手により遺跡全体の地形測量が行なわれ、堀之内貝塚は大・小７ケの貝塚から成ることが明らかになった。三大学合同調査はこの測量図をもとにして、堀之内貝塚の主要部分にシーⅠ、シーⅡ、リ、ハ、エ、サ、モ、ミ、ヱ地点と名づけられた９調査区において発掘調査が進められ、各調査区より堀之内式土器の良好な資料が得られている（註２）。

筆者の土器採集地点は第１図（×印）の三ケ所である。これらを仮りにａ・ｂ・ｃ地点と名付けると、ａ地点は三大学調査時のミ・キ地点の西側付近、ｂ地点はシーⅡ地点の南側部分、そしてｃ地点は、リ・ハ地点の北側部分である。堀之内貝塚の集落形成時期については、過去の調査によって堀之内Ⅰ式期が主体であることはほぼ確実である（註３）。しかしこれはあくまで一般的傾向であり、遺跡内の地点により、層位によって時期の異なった土器が発見されるのも事実である（註４）

筆者の踏査時の所見によればａ、ｂ、ｃ地点の周辺の状況は次のとおりである。

ａ　地点

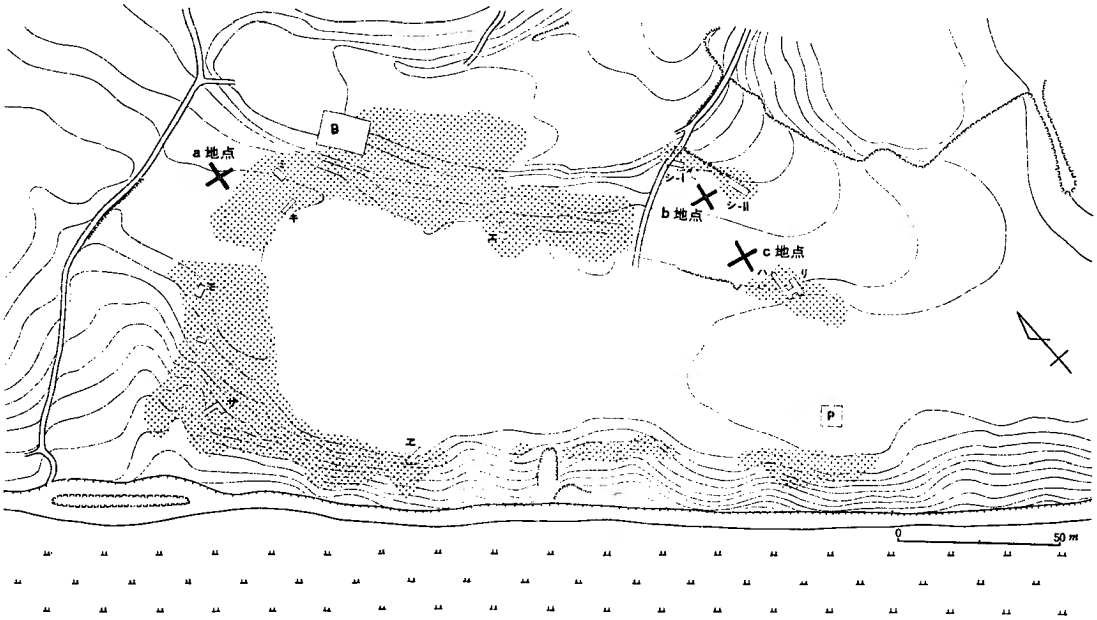
この付近は地表の攪乱が著しい。とくに台地上ではかなり内部まで破壊されており、ほとんど湮滅に近い状態であったが、斜面部には薄い混土貝層や混貝土層が存在した。この貝層はおもに加曽利ＢⅡ式～安行Ⅰ式にかけてのものであるが、この下層より若干の加曽利ＢⅠ式土器と共に第３図７～９に示す堀之内Ⅱ式の大型破片が発見された。

ｂ　地点

現在、畑地になっており、平面プランがマユ玉形の独立した小貝塚がある。この部分も地表面は耕作によってかなり攪乱されているが、その内部には厚さ１ｍを越えるイボキサゴの純貝層が現存している。このキサゴ層は、ほとんど無遺物層と言ってよいほどキサゴ以外のものを包含していない。ところが、この下に薄く堆積する大型のハマグリを主体とする混土貝層と最下層の暗褐色土層上面には、第３図１・２・５・６をはじめとする堀之内工式土器が多量に混入していた。このハマグリ混土貝層は下層の暗褐色土層中に喰い込むように堆積しており、１・２・５・６はこの中に投げ捨てられたような状態で散乱していた。これらは互に重なり合うようにして発見されており、ほぼ同時に捨てられたものと考えられる。このｂ地点周辺は現在の堀之内貝塚で最も貝層部の保存の良い区域であろう。

ｃ　地点

ｂ地点の南方約30ｍの位置にあたるリ・ハ地点と呼ばれた区域である。現在は山林および畑地と



第１図　堀之内貝塚の地形測量図（「市川市史」第一巻原始・古代より）

なっており、ここもやはり独立した小貝塚を形成している。三大学合同調査時には、リ・ハ地点より堀之内Ⅰ式期の竪穴住居址が２基発見されている。本地点より筆者は第３図３・４の２点を採集したが、これらの含まれていた層は三大学合同調査時のハ・トレンチ断面図の最下層である混貝土層（註５）に相当する。

Ⅱ　土　　器

筆者発見の土器は破片も含めて第２図～第５図に示す如く９点であり、その概略は以下のとおりである。

１　（第２図１）

高さ23㎝、口径35㎝、頸部から口縁部に向って大きく外反する大型の鉢形で、口縁部の１ヶ所に３つの環状突起がある。この突起は中央部のものだけが別のつくりで、左右が同じものである。本土器はいわゆる精製土器の部類に属するが、器面には縄文装飾はまったくなく、キザミ目を有する細隆線や粘土紐貼りつけによる８の字文、またはへら描き沈線による弧線・倒卵文などによって文様が構成されている。胎土中には多量の砂の混入が認められる。

この土器は縄文装飾がまったくないことと、口の大きく開いた極めて特徴的な形態を有する点で、ここに紹介する土器群の中では特異な存在である。なお、器体外面の色調は胴部上半～口縁部が一率に黒褐色を呈しているのに胴部下半は黄褐色で脆く、本土器は煮沸具として使われた可能性が強い。

２　（第２図２）

口径 23.5㎝を計る浅鉢である。口縁部の２ヶ所に相対して粘土紐を交互にからませた鎖状の突起が付けられており、これらの両端には竹管による刺突文が１対ある。この形態はのちに堀之内Ⅱ式～加曽利ＢⅠ式に盛行する、内側に渦巻文や平行線文の施された無文浅鉢へと移行するものと考えられるが、この土器には口縁～底部までＬＲ単節縄文が施されている。土器の内側は良く研磨されており、器面の色調は全体に黄褐色を呈するが、外面の色調は不均等である。

３　（第２図３・第４図）

高さ28㎝、口径25㎝の深鉢である。器形は底部から口縁部に向って口の開いた単純な形で、４つの波状口縁を有し、この波状頂部は指頭圧痕の施文により凹んでいる。文様は長さ３～４㎝巾のＬＲ単節縄文を原体とする斜縄文を地文とし、この上に半截竹管による懸垂文とそれをとりまく倒卵文などが施文されている。地文となる斜縄文と半截竹官文の施文位置はぴたりと一致しており、胴下半部はまったくの無文で良く研磨されている。

4　（第2図4・第5図）

高さ26㎝、口径25㎝。半精製ともゆうべき深鉢である。口縁部の1ヶ所に小波状突起を有し、この反対側の口縁部には粘土紐貼りつけによる8の字形の文様がある。器体は全面が対称でなく、第2図4のように口縁部の小突起を横に向けると、このように左・右が非対称になる。胴部の文様帯もこの突起下が中心になっているので、元来はこの部分がこの土器の正面なのであろう。胴部文様はＬＲ単節縄文を地文とし、その上から半截竹管により幾何学的文様を施しているが、両者の施文範囲は3のように一致せず、斜縄文は底部近くまで及んでいる。

5　（第2図5）

高さ21㎝、口径19㎝。口縁から底部までほとんど屈曲のない単純な深鉢形を成す。地文に斜縄文を施しているが、これは堀之内Ⅰ式には珍らしくＬＲＬ複節縄文である。この上に付けられた菱形状の文様は一見すると櫛状器具のようにみえるが実際には半截竹管を何度も重ねて施文している。この土器はいわゆる粗製土器に近いつくりであるが、底部付近の無文部と内側部分は良く研磨されており、煮沸用具として使用された可能性が強い。

6　（第2図6）

高さ42㎝、口径25㎝（推定）。大型の粗製深鉢形土器である。文様は粗いＬＲ単節縄文のみである。胎土中に砂・石英粒を多量に含み、器壁外面は底部近くが焼けたように赤褐色化しており脆く、その胴部上半は黒褐色を呈する。内側にはヘラ状器具で研磨した跡がみられる。おそらく煮沸具として使用されたものであろう。

7　（第3図1）

高さ20㎝、口径20㎝（推定）。大型破片より復原。本土器は、(1)底部から口縁部に向って外反する朝顔形の器形、(2)念入りな器面調整後に施文された口縁部無文帯上のキザミ目を有する細隆線と8の字形の文様、(3)口辺部に集中する直線的なすり消縄文帯などの特徴を備えた堀之内Ⅱ式の典型的な精製深鉢形土器である。但しよくみると、本土器の細隆線上のキザミ目は一般的にみられるヘラ状器具でなく、竹管もしくは丸棒の背によっている。この細隆線上に付けられる8の字文も、粘土紐をからげたものでなく、丸い粘土粒を隆線を狭んで2ヶ押しつけ、その中央を竹管で刺突することによって8の字形にみせかけている。

8　（第3図2）

高さ25㎝、口径25.5㎝（推定）。大型破片より復原。この手の深鉢形としては大型品で、つくりや文様も7に較べると粗雑であり、いわゆる半精製土器の部類に入る。口縁部無文帯の細隆線は7より低く、胴部文様帯の施文範囲も7に較べて巾広い。胴部文様は口辺部と胴部下半に巾約12㎝の間隔をおいて平行線をひき、この中に三角文を配したものであるが、地文となるＬＲ単節縄文は部分的にすり消されているだけである。

9　（第3図3）

高さ32㎝、口径30㎝（推定）。大型破片より復原。7・8に伴出の大型粗製深鉢形土器である。文様は底部近くの整形痕を除けば、ほぼ全面にわたってＬＲ単節縄文が施されている。器形は堀之内Ⅰ式の口の開いた単純な形の深鉢形に近いが、均一で薄手の器壁と口縁部の断面はむしろ堀之内Ⅱ式の精製深鉢形土器に近い。器体内側の整形・研磨は念入りに行なわれ、外側の底部近くは火にあたったように脆くなっている。煮沸用に使用されたのであろう。

むすび

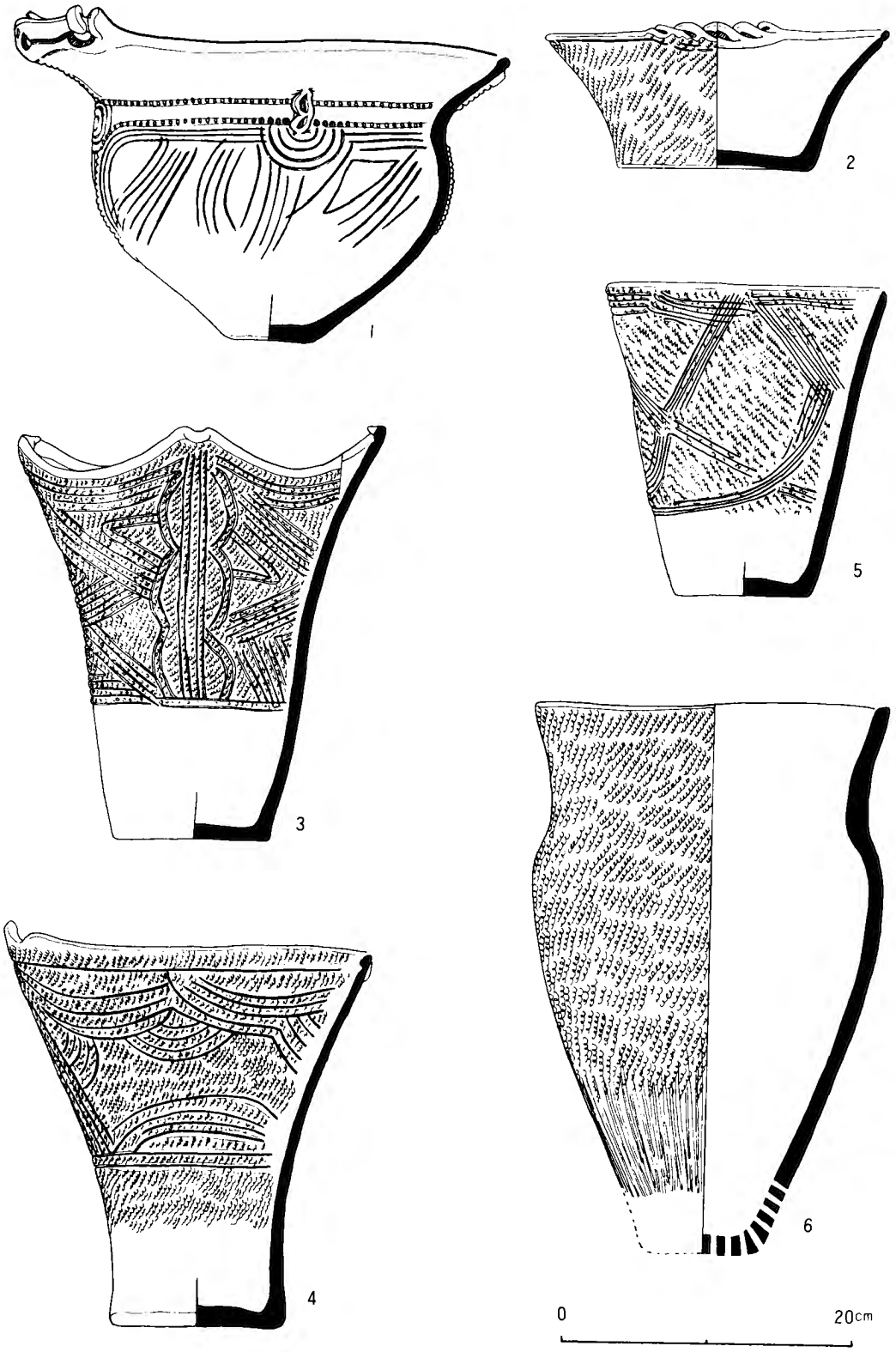
以上で堀之内貝塚発見の土器についての紹介を終えるが、最後にこれらに関するいくつかの問題を整理して結びとしたい。

(1)ここに紹介した土器群はいずれも縄文後期初頭に位置するものである。このうち第2図1～6は堀之内Ⅰ式期に属し、第3図1～3は堀之内Ⅱ式の範疇に入る。

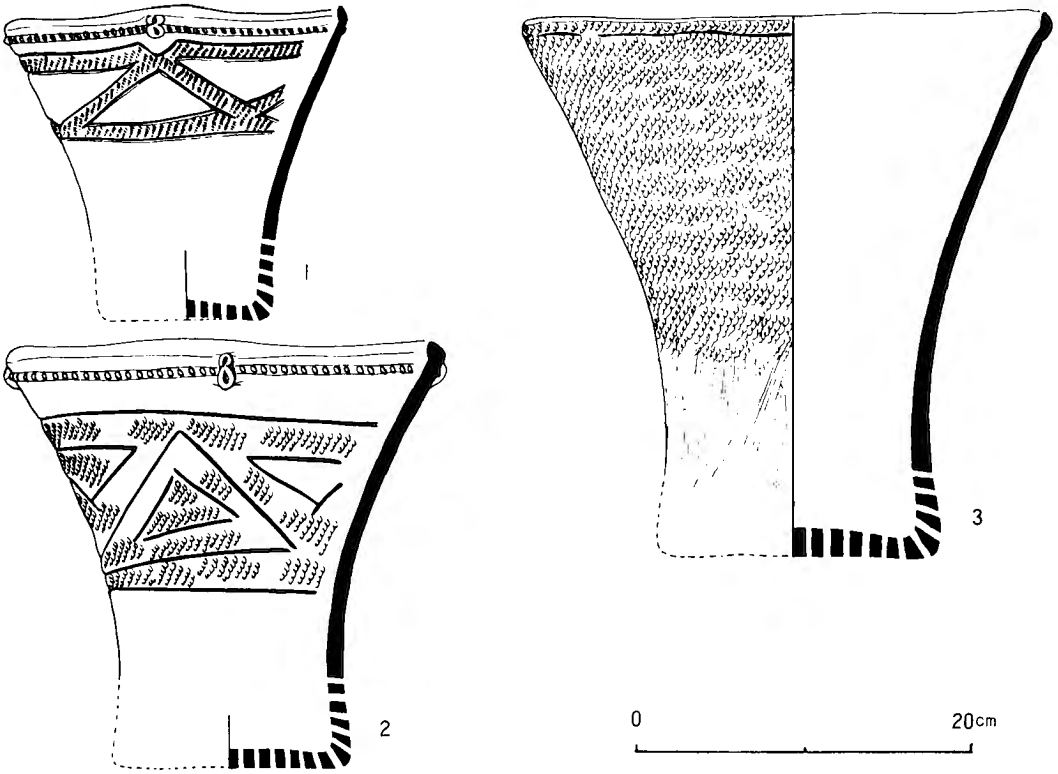
(2)堀之内Ⅰ式に属する6点のうち、1・2・5・6はその発見状態からほぼ同時期のものと思われる。第2図3・4も同様に共伴資料である。これらの土器群は、いずれもその形態・文様ともに現東京湾東岸地域における堀之内Ⅰ式土器のごく一般的な特徴を備えており、前述の三大学合同調査の報告文中にその類例をみることができる（註6）。

(3)ところが、第2図1については特殊な形態と器面に縄文装飾がまったくないという点で、ここに紹介した土器群中極めて特異な存在といえる。

山内清男氏もこの形態については型式設定当初より注目しており、『日本先史土器図譜』第6輯中において、この種の形態は武蔵相模方面

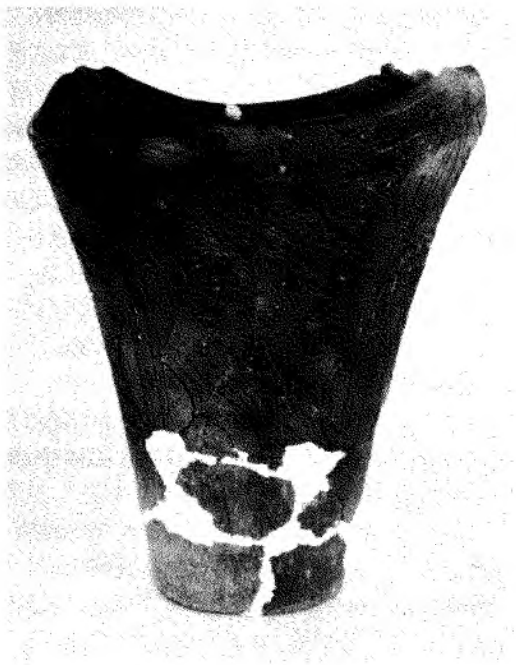


第２図　堀之内貝塚発見の縄文土器(1)　１～６堀之内Ⅰ式土器



第３図　堀之内貝塚発見の縄文土器実測図(2)　１～３堀之内Ⅱ式土器

◁　第４図　堀之内貝塚発見の縄文土器
（第２図３）



第５図　堀之内貝塚発見の縄文土器　▷
（第２図４）

に多く、下総方面には稀であると述べており、堀之内Ⅰ式土器に下総型と武蔵相模型のあることを強張している（註７）。本例は清水潤三氏の分類によれば（註６）、堀之内貝塚シーⅠ・シーⅡ地点の第４類に相当する。

(5)第３図７は堀之内Ⅱ式期の典型的な精製深鉢形土器であるが、ａ地点ではこれに煮沸用と思われる粗製深鉢（第３図９）が共伴している。従来、堀之内Ⅱ式の粗製深鉢形土器については明確な把握がされていなかったが、本例は数少ない伴出例である。

現在でも堀之内Ⅱ式土器というと、口縁部外反の朝顔状深鉢形で、器面に繊細なすり消縄文を施した精製土器をもってするのが一般的であり、三大学による堀之内貝塚合同調査の報告においても堀之内Ⅱ式については精製土器しか触れられていない。そもそも型式を設定した山内清男氏でさえも『日本先史土器図譜』第６輯中において、「堀之内式はその後、新旧二型式に細別された」（中略）「また堀之内旧・新両式とも亦夫々別個の特有な土器とすべきである」と両者を独立した型式と認めながらも、実際には堀之内新式（Ⅱ式）の粗製深鉢形土器については、なんら解説を加えていない。

筆者の知見によれば、堀之内Ⅰ式および加曽利ＢⅠ式には明らかに煮沸用具としての粗製深鉢形土器が伴ない、生活用具としてのセットを構成している。しかしながら、これらの中間に位置する堀之内Ⅱ式では、現在まで精製深鉢をはじめとする若干の形態しか把握されていない。これはいったいどうゆうことであろう。元来、堀之内Ⅱ式土器は生活用具としては不完全なままで存在したのであろうか？。

私見を述べれば、これは堀之内Ⅱ式期の文化層のあり方と密接な関係があるように思える。つまり、堀之内Ⅱ式土器を単なる時間の尺度としてではなく、当時の生活用具として遺跡との関係において把えると他の型式にはみられないある事実が浮んでくる。筆者の調査によれば、現在まで千葉県下における堀之内Ⅱ式期の遺構の発見は極めて少なく、単独の文化層の報告例も稀である。

このあたりに堀之内Ⅱ式土器の謎を解く鍵がありそうな気がするのである。

以上、堀之内Ⅱ式土器について筆者が従来より抱いていた疑問点をいくつかあげてみた。結びとしてはいささか中途半端になってしまったが、堀之内Ⅱ式土器について先学・諸賢の再検討を期待しつつ筆を置きたい。

（千葉市教育委員会）

〔脚註〕

〔註１〕山内清男氏は大正13年に堀之内式土器を設定し、昭和３年「下総上本郷貝塚」『人類学雑誌・43巻』において堀之内式が加曽利Ｅ式と加曽利Ｂ式の中間に位置するとの編年的序列を明らかにした。

〔註２〕後藤守一氏ほか「本会創立七十周年記念・堀之内貝塚発掘」『人類学雑誌・65巻第５号』昭和32年、日本人類学会

〔註３〕昭和29年の三大学合同調査に先立って、堀之内貝塚の地形測量を行なった明治大学（当時）の岡本勇氏は、その報告「堀之内貝塚の形状」文中において「……各地点にわたる堀之内式土器の圧倒的多数の出土は堀之内貝塚の名にそむかないことを物語っているとともに、この未発達な馬蹄形貝塚が、堀之内式土器の時期にすでにその大部分を形づくっていたことを教えている」と述べている。またこの三大学合同調査によって、リ地点とハ地点より堀之内Ⅰ式期の竪穴住居址が一基ずつ計二基発見されている。その他、リ・ハ地点発掘報告によれば、この他に先年、立教大学および武蔵野中学、武蔵野高校によって堀之内Ⅰ式期の住居址が二基発見されており、したがって現在まで計四基の堀之内Ⅰ式期の住居址が発見されていることになる。

〔註４〕庄司克「堀之内貝塚発見の晩期住居址とその遺物について」『マイクロリス・第21号』昭和41年、明治大学考古学研究会

〔註５〕西村正衛氏ほか「堀之内貝塚ハ・リ地点発掘報告」『人類学雑誌・65巻第５号』昭和32年日本人類学会

〔註６〕第２図２～５はいずれも清水潤三氏の「堀之内貝塚シーⅠ、シーⅡ地点発掘報告」『人類学雑誌・65巻第５号』中の第３類に比定されよう。

〔註７〕山内清男『日本先史土器図譜』第６輯、先史考古学会、昭和42年、17頁参照